

# 歌劇 なよたけ

## 全三幕二場

原作 「竹取物語」 作者不詳

THE ORIGINAL “STORY OF TAKETORI” ANONYMITY

戯曲 「なよたけ」 加藤道夫

DRAMA “NAYOTAKE” KATOH Mitio

作曲 小菅泰雄

COMPOSE ED KOSUGE Yasuo

### 登場人物

なよたけ	(ソプラノ/Soprano)	
石ノ上ノ文麻呂	(テノール/Tenor)	
大納言大伴ノ御行	(テノール/Tenor)	
清原ノ秀臣	(バリトン/Baritone)	
小野ノ連	(バリトン/Baritone)	
竹取ノ翁	(バス/Bass)	
花売り1	(ソプラノ/Soprano)	
花売り2	(ソプラノ/Soprano)	
平安人達	混声四部合唱(Mixed 4 voices)	(ソプラノ/Soprano) (アルト/Alto) (テノール/Tenor) (バス/Bass)
天人達	混声四部合唱(Mixed 4 voices)	(ソプラノ/Soprano) (アルト/Alto) (テノール/Tenor) (バス/Bass)

# アプローチ

## 「竹取物語」原作の冒頭より

今は昔、竹取の翁おきなというものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬づの事に使いけり。名をば讃岐の造 麿まろとなむいひける。その竹の中に、本 光る竹一筋ありけり。怪しがりて寄り見るに、筒の中光たり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。翁いふやう、「われ朝毎夕毎に見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子なり給うべき人なめり」とて、手に打ち入れて家に持ちて来ぬ。妻の 姫おんなに預けて養わす。美しきこと限りなし。いと幼なれば籠に入れて養ふ。

竹取の翁おきなの子を見つけて後に、竹を取るに、節を隔ててよ毎に、金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁 やうやう豊かになり行く。この児養ふ程に、すくすくと大おほきになりまざる。三月許ちゆうになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪上かたちなどさだして、髪上せさせ裳著す。帳の内よりも出さず、いつきかしづき養う程に、この児の容貌清らなること世になく、家の内は暗き処なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しきことも止みぬ。腹立たしきことも慰みけり。翁竹を取ること久しくなりぬ。勢 猛いかげの者ものになりけり。この子いと大になりぬれば、名をば三室戸齋部秋田みむろどのいんべりあきたを呼びてさす。秋田、なよ竹の赫映姫とつけつ。

## 戯曲「なよたけ」の発想（「なよたけ」巻頭より）

「竹取物語」は、こうして生まれた。

世の中のどんなに偉い学者たちが、どんなに精密な考証を楯にこの説を一笑に付そうとしたも、作者はただもう執拗に主張し続けるだけなのです。

「いえ、竹取物語はこうして生まれたのです。そしてその作者は石の上の文麻呂いそという人です。……」

## 歌劇「なよたけ」台本

### 第一幕「竹取の翁の家」

#### 登場人物

なよたけ	(ソプラノ)
石ノ上ノ文麻呂	(テノール)
大納言大伴ノ御行	(テノール)
清原ノ秀臣	(バリトン)
竹取ノ翁	(バリトン)

例えば平安京の東南部。幽麗なる孟宗竹林に囲まれた竹取の翁の家。舞台上手には、その家の一部。土間と居間がある。すべて竹で意匠されている。

奥手は一面、無限と思われるほど、深い孟宗竹林、その中を通過して、下手の方へ小路が続いている。舞台一面、かがやく緑の木漏れ日に満ち溢れている………。家の土間には竹取の翁が座り込んで青竹を籠に編んでいる。なよたけの弾いている美しい箏そうぎやく曲が響いている。

大伴の御行、粗末な狩りの装束で、下手より登場。中年男。荘重な歩みと、悲痛な表情を取り繕っているが、時として彼のまなざしは、狡猾な輝きを露呈する。……思い切ったように土間の敷居の所に姿をあらわす。

御 行 (忍びの姿をした大納言大伴の御行が登場する。思い切ったように) こんにちは、お翁さん。

翁 (竹籠を編んでいる)

…… 間 …… (箏の音)

御 行 先日の手紙は、……あのひと……読んで下さいましたか？

翁 (竹籠を編みながら) さあ、どうですか、……まあ、渡すには渡しときましたがね。何せまだ字もろくに読めないほんの田舎者の小娘でござりまするで。

翁のARIA……大層綺麗な紙に書いて下さったと、いやもう、とても喜びましてな。(御行、嬉しげな表情) タベ、あれの部屋に行って、ふと何気なく見ましたところが、お手紙は鶴に折られて、天井からぶらさがっておりましたじゃ。

…… 間 …… (箏の音聞こえてくる)

御 行 あの箏は、あれは、あの person ですね？

翁 へえ。

御行ARIA ああ、何と云う妙なる楽の音だ。あのひとの清らかな魂がこの汚れ多い現世に、天の調べを伝えてくれるのです。

(深い溜息とともに) なよたけ……お翁さん!私はまだこれ以上我慢ができません!なよたけを私に下さい!なよたけは私の妻です!なよたけを私に下さい!今こそ、まことのこころを持った女(ひと)にようやくめぐり逢うことができましたのです。本当に永い苦勞のし甲斐があったと云うものです。

(威厳をもって) ねえ、おじいさん、私は大納言大伴の御行です。

翁 (はっとしたように御行の姿を眺める。次第次第に平伏していく。愛想よく) ……それは、それは……ちっとも存じませんでした。何という勿体ないこととござりましょう。大納言様でいらっしゃいましたか?このような人里離れた下人の賤が家にしげしげとお通いなさる御方が、よもや大納言様でいらっしゃろうとは、この爺め、夢にも考えてはおりませなんだ。……どうぞ、これまでの失礼の数々は平に御容赦くださいませ。それにしても、まあ、大納言様のような立派なお方にもらっていただいて、こんな嬉しいことはござりませぬ。居間に上がって、粗末な脇息をすすめる) さあさあどうぞ、むさくるしい所ではござりますが。どうかひとつ、お掛けくださりまして。

…… 間 …… (箏の音が聞こえてくる)

翁 なよたけはしあわせものでございます。

大納言 そんなにかしこまらなくてもいいんですよ。

二重唱 翁 さような思いをかけてくださるだけでも。

大 おじいさん、ただ、わたしは、なよたけにたいする誠意が通じてくれなこんなうれしいことはありません。

翁 なよたけにとりましては、身に余る光榮でござります。こんなうれしいことはありません。

…… 間 …… (箏の音)

翁 なよたけは、いま連れてまいりますでござりますから。

…… 間 …… (箏の音)

御 行 (おもねるように) ああ、それから、お爺さん、これは何ですが、なよたけの素性も、わたしの素性も、処あらわしの式が済むまでは、絶対にひ密にして誰にも知らさぬようにお願いしますぞ!

翁 (怪訝そうに) へえ……。

御 行 (弁解するように) 別に、これは、どうという訳もないのですが、ただ、あのように麗しいなよたけを、しばらくは皆の者に秘密にしておいて、三日の餅でも祝って、立派な奥方になってから、公然と皆の者をうらやましながらせよと云う気持ちなのです。葵の祭に日あたりにも、お迎えの車をこちらに寄越せたらと思っています。

翁 何分よろしくお願いします。では、なよたけを呼んでまいります。

…… 間 …… (箏の音)

文麻呂と清原 (文麻呂と清原、下手より登場) 大納言殿、忍びの恋路のお邪魔だとして、申し訳ありません。

御 行 誰だ!

文麻呂 石の上の綾麻呂の息、石の上の文麻呂!

清 原 大学寮学生、清原の秀臣!

御 行 何しに来た!

文・清 道ならぬ恋路に身をやつしておられる大納言殿を、お諫め申しに参りました!

御 行 生意気を云うな!

なよたけ (ステージ上手裏で) いやです!いやです!そんなこと、わたしいやです!

…… 静かな間……

御 行 (狼狽の極み。ややあって、大声で上手奥に向かって叫ぶ) お爺さん!葵の祭の日に、また参りますぞ!

翁 大納言様!大納言様!ちょっとお待ちください!(文麻呂と清原に向かって) おや、あなた方は、<sup>がく</sup>一体だれだい?

清 原 大学寮学<sup>じょう</sup>生清原の……

文麻呂 お爺さん!落ち着いて下さい!

清 原 何も、そう慌てることはありません!

文麻呂 ありません。

文・清 僕たちは、なよたけを助けにやってきたんです。

(なよたけ、上手奥の部屋から、かすかに泣きながら静かに姿を現す。)

文・清 (感動的に) なよたけ……。

清 原 もう、お泣きになることはありませんよ。

なよたけ あなた方は、どなたですか。

文・清 あなたの心からの味方です。なよたけ、あなたは汚れ多い都へなぞ出る人ではありません。

五重唱<sup>文・清</sup> なよたけ、あなたは汚れ多い都へなぞ出る人ではありません。

大 なよたけ、あなたに対する私の誠意が、お爺さんにも通じたのです。

翁 こんなふつつかな田舎娘を本当にもらってくださいね。

な わたしは、お父さんといつまでも、いつまでも一緒にくらしたい!

大 なよたけ、華やかな都へ行きましょう。都は美しい所ですよ。

清 都の人達がどんなに汚れきっているか、表面ばかりが華やかな文化に飾られ、優雅な装いをしているけど、

翁 こんなふつつかな、なよたけをもらってください幸せです。

文・清 皆、私利私欲に走っているのです。

清 他人の幸せなど微塵も考えやしません。  
翁 なよたけ、おまえは幸せですよ。  
な わたしは、都へ行きません。

清 原 あなたは、自然とともに生きるべき人だ。

文麻呂 あなたの心が分かる人は、  
文・清 自然の心の分かる人だけです。

清 原 自然の心とは、愛です。

文麻呂 あなたの心を知りうる人は、  
文・清 自然の心を知りうる人だけです。

清 原 あなたは竹の精だ!

文・清 若竹の精霊だ!

御 行 生意気を云うな!

翁 なよたけ、大納言様が、お前をもらってくださるとおっしゃり、本当に身にあまる光栄でござります。

なよたけ そんなこと、いやです!

御 行 葵の祭の日あたりにでも、お迎えの車を寄越せたらと思っています。

文・清 なよたけ、大納言殿は、絶対に真心を持っている人ではありません。決してあなたの美しい心の分かる人ではありません。

清 原 あなたが大納言殿に嫁がれたら、それこそ大変な不幸ですよ。

文・清 大納言殿には、立派な奥の方がいるのです!

御 行 (狼狽の極み。しばらくは惑乱状態。……ややあって) お爺さん!……葵の祭の日に向かえに来ますぞ!(土間に立っている二人を突き飛ばさんばかりの勢いで、倉皇として下手へ逃げ去る)

翁 大納言様! 大納言様!(草履をつっかけ、後を追って) 大納言様!大納言様!  
(下手へ退場)

…… 間 ……

文麻呂 なよたけ、僕たちを信じてください。もし、そのまま連れて行かれてしまったら、あなたの一生は滅茶滅茶です。

なよたけ ご親切にありがとうございます。

清 原 あらためまして、僕は大学寮学生清原の秀臣です。

文麻呂 僕はその友人、石の上の文麻呂です。

なよたけ わたしは、なよたけと申します。お父さんが、裏の竹藪の本光る竹の中から私を取り上げて大切に大切に、育て上げて下さいました。こうした生まれの話は決してしないで、実の子供以上に生き甲斐を感じて、可愛がって下さいました。わたしはお父さんといつまでも、いつまでも一緒に暮らしたい。月夜の晩は、わたしは、お月様といろいろお話をします。わたしは、お月様の子だと。何時かきつと、満月の晩に、お迎えが来るのだと聞きました。わたしは、なよ竹の赫映姫。

…… 幕 ……

第二幕「葵の祭・都大路の一郭」

登場人物

なよたけ (ソプラノ) 鬘…… 日本古来の髪飾りの一つである。初めは蔦草など

石の上の文麻呂	(テノール)	で結んだものが、自然に装飾視されるようになり
大納言大伴の御行	(テノール)	髪飾りの一つになった。上代にはくまきかずら>
清原の秀臣	(バリトン)	<木綿かずら>など2・3の名が見えるが、のちに
小野の連	(バリトン)	蔦草や植物繊維に限らず、季節の花葉果実を紐
花売り1	(ソプラノ)	に連ねて、鬘とした。万葉集<梅の花咲きたる苑
花売り2	(ソプラノ)	の青柳は蔓にすべくなりにはけらずや>とある。
平安人の老若男女	(混声合唱)	藨…… 蔦、つる性の植物の総称。

都大路の一郭。……とある辻広場。葵の祭の午後。うららかな五月の祭り日和である。舞台の両端には、美しい花の咲き乱れた葵の茂みと、小柴垣がある。そぞろ歩きの平安人達が、あるいは下手から上手へ、あるいは上手から下手へと、話しながら往来する。誰もが華やかに着飾り、それぞれ美しい花のついた葵の鬘をかけて、衣装には藨をつけている。……遠くで神楽の笛が響いている。街は人々のざわめきで満ち溢れている。

二重唱 花はいらんしょか。花はいらんしょか。葵と桂はいらんしょか。葵と桂は（花売1.2）  
いらんしょか。葵と桂はいらんしょか。（上手に文麻呂が現れる）

文麻呂 （花売りをじっと見て、自分の葵の鬘をむしり取る。上手に戻り、退場）

二重唱 今日葵の祭りです。葵と桂で飾りましょ。桂が陽で、葵が陰で葵桂（きっけい）

花売1.2 あわせて祭りのしるし。葵と桂はいらんしょか。いらんしょか。

花売1.2（頭上の籠を降ろして噂話を始める）

花売1 そういう噂なんですって。

花売2 まあ、大納言さまが？

花売1（得意そうに、ひそやかに）もっぱらよ。

花売2（同情的に薫蒸を込めて）奥の方のお可哀想なこと！

花売1（冷やかに）それに、（得意になって）今度のお相手は、なんでも、竹籠作りのお爺さんとかの娘で、それもまだ十七、八のとんだ賤しい田舎娘なんですって！

花売2 まあ！呆れ果てた！……ね、（興味津々と）どなたからお聞きになったの？

花売1（じらすように）さるお方からね。（上手に歩き始める）

花売2（甘えるように）ねえ、どなたよ。（上手に歩き始める）

花売1（からかうように）さる、やんごとない御方。……ふふ、……それは秘密。

花売2（ステージ裏で）まあ、憎らしい！

（下手より清原秀臣と小野の連が話し合いながら登場。中央まで来ると、立ち止まって話し合いを続ける）

小野 む。……それは僕もそう思った。文麻呂の奴、まるでもう、おれこそ物の怪にでも取り憑かれてしまったような有様だ。

清原 それだから、僕は困るんだよ。……一人で張り切って大納言殿の噂をああしてこそこそ。都中にふれ回ってさ、……あれで、自分ではうまく行っているものと思っているらしいけど、……僕あ、僕あ何だか恥ずかしくなって来たよ。

小野 恥ずかしい？……おい、清原。恥ずかしいと云うのはどういうことだい？……情けないことを云うじゃないか。……そりゃあ僕はこの計画の部外者だし、親友のよしみをもって、陰ながら君たち二人を援助してきただけだが、……いくら何でも恥ずかしいとは何だね？それで君、石の上に対して申し訳が立つと思うかね？

清原 小野。僕は白状する。……ぼくは、なよたけが好きじゃあなくなっちゃったんだ！僕の恋はしらじらと醒めきってしまった。

…… 間 ……

小野 ……清原。……君が、あの烈しい恋の醜態から醒めたからって、……別に俺が君に対して何を云うことが出来よう？しかし、分からん。……君は親友との盟約を裏切って

までも、この計画から逃げ出したいって云うのか？

清原 あいつは完全に気が触れているんだ！僕は気違いと一緒にこんなことをするのは、まっぴら御免だ！

小野 気違い！おい！清原！いくらなんでもそりゃあひど過ぎるじゃないか？

清原 僕あこんなことは云いたくないさ。だけど、本当なんだから仕方ないよ。あいつは、あいつは気が狂ってしまったんだ！

小野 清原！（あきれたように）貴様、……（真剣に）本当にあお男の発狂を信じているのか？

清原 うん、信じてる。

小野 （突然、上手を見て）あ！やって来た！

清原 小野、僕は失敬する！頼む！あいつにそう云っとくれ！僕あもう今日限りこんな大それたことは本当に止めた！僕あ！あいつとは手を切った！（下手に逃げ込もうとする）

小野 （清原を引き留める）おい待て！清原！待てと云うに！

（上手から、石の上の文麻呂が現れた。先程の粗末な装束で、やる気十分な血気をみなぎらせている）

文麻呂 おお、清原と小野ではないか！

清原小野 俺だ！

文麻呂 何だ！君も来てくれたのか！小野！いよいよ待ちに待った今日の日だ！

小野 おめでとう！

文麻呂 用意万端は、既に整った！

清原小野 成功を祈るよ！そんなところに立ってないで、こっちに来いよ。

文麻呂 うむ。

（文麻呂ステージ中央に来る。目は天空を浮遊し、異常に興奮している。清原と小野、文麻呂をじっとみつめている）

小野 なかなか大した装束（いでたち）ではないか。

文麻呂 これか？虚飾をはぎ取ったのだ。本然の姿に戻ったのだ。（両手を大きく広げて）どうだ！

清原小野 なかなか大したものだよ。

小野 ところで、君たちはこれから何をしようと云うのだ。

文麻呂 何だって！

小野 いや、つまりだね、具体的に云って、どう云う風にことを運ぶつもりか、聞いているんだ。

文麻呂 分かり切っているじゃないか！……なよたけは、車に乗せられて、間もなくここへやって来るのだ。俺と清原は、ここで待ち伏せをして、大納言の魔手からなよたけを救い出すのさ。……なよたけを、なよたけを大納言の魔手から救い出さなければ、救い出さなければならぬんだ！

清原小野 それがいけないんだよ。

文麻呂 何だ！

小野 慎重な計画を立てずに衝動的にやってしまう。何のことはない、向こう見ずの馬車馬だ。めくら滅法と云うやつだ。

清原小野 それでは、事をし損じるよ。

清原 物事ははっきり筋道を立ててから……

文麻呂 俺はただ、天の呼び声に応じて、正しいと確信する道を進むだけさ。なよたけを救い出すのは、俺が天から受けた命令だ。道を開いてくれるのは、天だ！天は正しい者の味方をするんだ！

小野 何も、そう大声を立てなくてもいいじゃないか。

清原 もう少し冷静になってくれ。……もう少し現実的にものを見てくれないか。

文麻呂 あはははは（あざ笑う）。

清原 何がおかしいのだ？  
文麻呂 いや、君達も哀れむべき凡人の仲間だと思ってね。

…… 間 ……

小野 石の上。……君は少し疲れているようだ。何かこう、特別に具合が悪いと云うところはないのか？例えば、夜眠れないとか。

文麻呂 眠れないのではない。眠らないのだ。なよたけのことを思うと、夜など安閑としておられんからな。

清原小野 そう云う不摂生をやるから正常な心の均衡を失ってしまうのだ。

小野 それでは、こう云うようなことはないかい？普段見たこともないものが、見えてくるとか、聞いたこともないものが、聞こえて来るとか。

文麻呂 あるね！

小野 あるのか？

文麻呂 俺はどこにいたって、なよたけに逢いたくなれば、俺の目の前に彼女をあらわすことが出来る。

清原小野 (二重唱) 文麻呂は、気が狂ってしまった。

文麻呂 (なよたけの声が聞きたくなれば、いつでもはっきりと聞こえてくるのだ！

清原小野 (二重唱) なよたけへの恋のために、気が狂ってしまった。

文麻呂 (あの竹の葉がさやさやと春風にそよぐ音は聞こえないのか。

清原小野 (二重唱) 文麻呂を見捨てるのは忍びないが、俺たちは、俺たちは気違いと行動を…

文麻呂 (聞こえるのだ……聞こえるのだ……手に取るように聞こえて来るのだ！

清原小野 (二重唱) 俺たちは、俺たちは行動を伴にするのは、まっぴらだ。

清原小野 (二重唱) まっぴらだ。まっぴらだ。まっぴらだ。

清原 (下手へ逃げて行こうとする)

文麻呂 おい！どこへ行くんだ！どこへ行くつもりなのだ！

清原 石の上！俺は失敬する！君を見捨てるのは忍びないが、俺は気違いと行動を伴にするのは、まっぴら御免だ！君は恋のために気が狂っているんだ！都の人達は、みんな君のことを気違いと云っているんだ！君とは、もう、今日限り絶交だ！君なんかとつき合っていたら、俺たちの将来まで、めちゃめちゃにされちまうからな！（逃げるように、下手へ退場する）

…… 間 ……

文麻呂 清原！何を云うんだ！待ってくれ！清原！

小野 石の上！俺も失敬する！（逃げるように、下手へ退場する）

…… 間 ……

文麻呂 ……俺が恋をしている？……恋のために、気が狂っている？

(両手を頭にやって抑える。そのまま、がっくりとひざまずく文麻呂)

…… 間 ……

(ステージ裏から神楽の笛の音が聞こえてくる。下手から平安人達が歌いながら登場する)

合唱 文麻呂が気が触れた。気違いはまっぴら御免。文麻呂が気が触れた。気違いはまっぴら御免。まっぴら御免。



女声二部 (嘲笑・哄笑・私語のように) ウフフ、ウフフフ、ホホホ、オホホホ  
男声二部 (嘲笑・哄笑・私語のように) ワッハハ、ワッハハハ、ワッハハ、ワッハハハ  
合唱 (ウフフ、ウフフフ、ホホホ、オホホホ  
ワッハハ、ワッハハハ、ワッハハ、ワッハハハ  
文麻呂が気が触れた。気違いはまっぴら御免。  
(大納言大伴御行、下手より御所車とともに登場する)

御行 おや、文麻呂殿。どうしました？今日は少しは気分がよくなりましたか？さあ、それでは、この機会を見計らって、なよたけの婿取りの式をいたしましょうかな？どうも、花婿の方が揉鳥（もみえ）帽子にその格好では、あまりぱっとしません、さあ、文麻呂殿、お立ちなさい。……あなたの恋に焦がれたなよたけが、待っているのですよ。

(文麻呂の手を取って、立ち上がらせる。中央奥の御所車の方へ導く。群衆は中央の道を開く。両側の群衆は、この儀式を見守っている。大納言は御所車の前まで文麻呂を連れて行く)

御行 そう云うわけで、皆さん、間もなく皆さんの前に連れ出してお目にかけますが、どうも、御所車の中のなよたけも、やはり多少この辺が（頭に手をやって）……妙ちきりんなのです。こちらにいらっしゃる汝夫（なせ）の君と、あちらにいらっしゃるなよたけを、皆さんの前で娶せてみたらと考えたわけですよ。

合唱 大納言様、それは、本当におもしろい思いつきでございます。

御行 いや、これは私が、この年に一度の吉日を選んで、

合唱 選んで…

御行 皆さんを喜ばせてあげようと

合唱 喜ばせてげようと

御行 思っ、一月も前から

合唱 一月も前から

御行 考えていたことなのですよ。それを、あなた、どなたか知らんが、まるでこの物狂いの娘が、人もあろうにこの私の所に興いりをするかのように

合唱 興入りをするかのように

御行 云いふらしたのですからね。いや、もう、お陰でこの大納言、とんだ迷惑をしましたよ。

合唱 とんだ迷惑を

御行 しかも私にはれっきとした奥の方がいるのですよ。

御行 (噂をなさるのも、噂をするのも時には愛嬌があって、いいものですが、いくら何でも  
合唱)、そんな根も葉もない噂を都中にふれ回されたら、どんなお人好だって、そりゃあ、あなた、怒りますよ。

文麻呂 ……嘘だ！そんなことは、みんな嘘だ！

合唱 大納言様！大納言様！この人何かいってます。いくらか正気づいてきたようですよ。

御行 この中にあなたの恋焦がれるなよたけがいるのです。文麻呂殿、なよたけは、はじめからあなたのものだったのですよ。はじめからあなたのものだったのですよ。どうしたのです？うれしくないのですか？……さて、それでは大納言の信用が丸潰れになってしまう。早速なよたけにお引き合わせするといたしましょうか。……錦丸！早速簾（すだれ）を引いてください。

錦丸 かしこまりました。

(御所車の簾があがる。美しい衣装をまとったなよたけが立っている。片手には青々とした竹笹の枝を持っている)

御行 さあ、なよたけ。あなたの婿君のいらしゃるところに着いたのです。さあ、下りなさい。(なよたけの手を取って御所車から下ろす。片手に持っている竹笹を見て) おやおや、大変なものをお家から持って来たんですね。まあ、それは持っていないさい。持

っている方が、あなたに似合います。さあ、こちらの、この汚い格好をしたのが、あなたの婿君です。

なよたけ

文麻呂。

文麻呂

なよたけ。

合唱

ワハハハハッ、ハハハ、ワハハハハッ、ハハハ、ワハハハハッ、ハハハ

(突然、もの凄い雷光と同時に天地の揺らぐような雷鳴。……あたりは、みるみる暗くなった。烈しい豪雨が降り出した)

合唱

キャー、ワアー (恐怖の声をあげて、消え失せる)

御行

ああこれは、大変な天気になっ！なって来た！あなた方も、さ、はやく！ああこれは、大変な天気になっ！なって来た！あなた方も、さ、はやく！何を、そう、のん気に抱き合ったりなどしているのです！これは、ひどい雨だ！あなた方も、はやく！何を、そう、のん気に抱き合ったりなどしているのです！これは、ひどい雨だ！あなた方も、はやく！

(再び、前よりもっと烈しい雷光と雷鳴)

御行

ウアーアーアー (叫び声を上げて、消え失せる)

(二人は、何の物音も感じないかのごとく、驟雨の中に、寄り添っている。烈しい雲脚が次第に薄らいで行く。あたりが、だんだん明るくなってきた)

なよたけ

文麻呂。

文麻呂

なよたけ、僕はなよたけが、大好きだ！

なよたけ

あたしも文麻呂が大好きよ！私が車に乗せられて、都へ連れて行かれるのをどうして止めてくれなかったの？どうして、私が好きになったとき、私の所にとんできてくれなかったの？

文麻呂

なよたけ、許しておくれ。僕は、自分の心を偽っていたんだ。なよたけに初めて逢ったときから、僕は、僕は好きで好きでたまらなかったのに、今日になるまで自分の本心を隠していた。

なよたけ

いいのよ、いいのよ。文麻呂はいい人なんだわ。

文麻呂

なよたけ、僕は都の人達に見捨てられてしまった。親しい二人の友人までが、僕を裏切ってしまった！けれど、僕にはなよたけがいる！なよたけ、僕はなよたけが大好きだ！

なよたけ

わたしも、文麻呂が大好きよ！世の中の男の人達は、私のところに、我も我もと、我も我もと、云い寄って来たけれど、云い寄って来たけれど、私は誰も信じられなかったわ。誰も信じられなかったわ。私を幸せにしてくれる人は、幸せにしてくれる人は、世の中に、文麻呂だけよ。

文麻呂

なよたけ、僕は、都の家を引き払って、なよたけのところへ行こう。なよたけと一緒に一生暮らすんだ！

二重唱

なよたけ

ねえ、文麻呂、私たちは、きっと、小さな星なんだわ。あの空に、いっぱい輝いている数知れぬ星と同じような……幸いの星なんだわ。

文麻呂

幸いの星だ！僕たちは大空の中に光る、たった一つの幸いの星だ！

なよたけ

そして、とてもきれいな星にちがいないわ。きっと一番美しく輝いているんだわ！

二重唱

とてもきれいな星。とてもきれいな星。たった一つの、たった一つの、幸いの星。小さな星、小さな星。幸いの星。小さな星。

…… 幕 ……

### 第三幕

#### 登場人物

なよたけ (ソプラノ)  
文 麻 呂 (テノール)  
竹取の翁 (バ ス)  
天 人 達 (混声合唱)

#### 第一場「竹林の小さな空き地」

舞台は深遠なる竹林の奥。一面の孟宗竹が無限に林立し、夕日が竹の緑に反映して異様に美しい神秘境を醸し出している。中央に小さな空き地があり、竹取の翁が後ろ向きに坐って、無心に竹を伐る斧を振るっている。下手の前舞台より旅姿の文麻呂が現れる。しばらくは、耳を澄ませて立ち止まっているが、斧の音に吸い寄せられるかのように、舞台の方へ歩み寄って行く。文麻呂は、しばらく夢でも見ているかのように、翁の後ろ姿を眺めている。……

文麻呂 お爺さん！石の上の文麻呂です。僕は都を捨てました！

翁 (斧を振るう手を、ふと止めて、訝しげに、後ろ向きのまま耳を澄ます。そうっと振り返って) 今時分、またどちらえ？……

文麻呂 この竹林の中で一生暮らすんです。僕は都の人達から見捨てられてしまった。親しい友達までが、僕を裏切ってしまった。だけど、僕にはなよたけがいる。ぼくはなよたけが好きです！

翁 なよたけ？

翁 儂の美しい娘なよたけ……。貴方は御存知なのか？あの、昔からのいいつたえを？

文麻呂 いいつたえ？

翁 この竹の里の云い伝えですじゃ。なよたけのかぐや姫の語り伝えですじゃ。儂の、儂の夢ですじゃ……。

文麻呂 お爺さん！……あなたはなよたけを云い伝えや夢だとおっしゃるのですか？

翁 かぐやを愛し始めると、その時から人は夢を見始めるのじゃ。儂だって、この両の眼で何度あれの美しい姿を見たか知りませぬ。何度かぐやの可愛らしい体を抱いたか分かりませぬ。……だが、お若い方、なよたけのかぐやは愛するものの手の届かぬ夢なのじゃ。

文麻呂 おじいさん、なよたけは手の届かぬ夢ではありません。なよたけは、僕の命です！

翁 あの竹の林の中を飛び回っているあれの美しい姿。……唄をうとうているかぐやの可愛い声。……あれは今でも時々この儂の眼に儂の耳にはっきりと蘇って来る。だが、あれは、儂にはもう、何千年も遠く過ぎ去った昔の夢の中のことのような気が致しますのじゃ。……おう、あれはいつのことじゃったろう？……貴方はあれがどこから生まれ出たかご存じかな？あれは、本光る若竹の筒の中から生まれ出たのじゃ。儂はまるで宝物を扱うように、大事に可愛がり育てましたのじゃ。そのうち、あの娘の容貌(かおかたち)の清らかに美しく行くこと。それはもう、云うに云われぬほどで、そのために、家のなかは暗い所もなく、いつも光輝いているようであった。……なよたけのかぐやはこの儂のたった一つの生き甲斐だった。

文麻呂 そうです、おじいさん。僕にとってもなよたけは、たった一つの生き甲斐です。

二重唱 たった一つの生き甲斐、たった一つの生き甲斐。

翁 (なよたけのかぐやは、たった一つの生き甲斐だった。

文麻呂 (なよたけのかぐやは、たった一つの生き甲斐なんだ。

文麻呂 おじいさん、僕はなよたけが好きです。大好きです。僕はこの竹林の中で、なよたけと一生暮らすんです。なよたけは、自然とともに生きるべき人です。若竹の精霊です。

なよたけ (突然、風の音に交じって聞こえてくる) 文麻呂！文麻呂！文麻呂！

文麻呂 (は、と我に返ったように) なよたけ！どこにいるんだ！

なよたけ (風の音烈しく) 文麻呂! ……わたしは、竹の林を出た! 果てしもない夜空の下に立っているのです!

文麻呂 お爺さん! ……なよたけが僕を呼んでいる! 僕にはなよたけの声が、がっきりと聞こえるのです。なよたけは夢ではありません! なよたけは、この竹林の外で僕を待っている。…竹の里の云い伝えは滅んでも、なよたけの姿は決して滅びません! なよたけはこの竹の里を捨てて、今こそ僕の妻になるのです!

翁 なよたけは、夢じゃ! かぐやは竹の里の云い伝えとともにあるのじゃ! なよたけのかぐやは、月の都から送られてきた天女じゃ! 月の都に呼び戻されるのじゃ! この世の女として、愛してはなりませんぞ!

なよたけ 文麻呂! 文麻呂!

文麻呂 お爺さん! 僕は行きます。……僕は行きます!

翁 なよたけは、月の都から来た天女じゃ! 月の都に呼び戻されるのじゃ。人の世の女として、愛してはなりませんぞ! 愛してはなりませんぞ!  
(緑色のヴェールが下りる)

…………… 間 ・ 暗転 ……………

### 第二場「小高い丘陵」

緑色のヴェールが再び上がる。舞台は竹林を出たばかりの所で、小高い丘陵の一端。遠い丘陵が幾つか連なっているのが夜空に遥かに黒く浮かんで見える。天空には燦然と、星々がきらめいて、深遠なる宇宙の絵図が果てしもなく広がっている。

なよたけ (下手より登場) 文麻呂!

文麻呂 (上手ステージ裏より) なよたけ!

なよたけ わたしは、ここよ!

文麻呂 (上手より登場) なよたけ! 僕は、なよたけの所に来た!

なよたけ 文麻呂! (文麻呂の胸にすがりつく) 文麻呂! あたしを幸せにしてくれる人は世の中に、文麻呂だけよ!

文麻呂 僕達は自由だ! 僕達の幸せを邪魔するものは何一つありはしない。

二重唱 何一つありはしない!

なよたけ わたしは、初めて文麻呂に逢ったときから、二人だけの幸せを夢見ていたわ。それは、青々とした竹の林に囲まれて、文麻呂と一生楽しく暮らすことなの。

……………間……………

なよたけ ……あたしは、もう、この竹の林を見捨ててしまった。一旦都へ出てしまったあたしは、きっと罰を受けなければならないんだわ。

文麻呂 どうしたの? しっかりおし! なよたけ、何を云ってるんだ! しっかりおし!

……………間……………

なよたけ (突然、烈しい不安に襲われたごとく、表情は硬直した) 文麻呂! あたしをしっかりと守って! あたしをお月様の所へなんか行かしては嫌よ!

文麻呂 お月様!

なよたけ ほら! 来るんだわ! お月様からお迎えの人達が雲に乗って下りて来るんだわ!

合唱 (ステージ裏より天人達の合唱) なよたけの赫映姫、なよたけの赫映姫、なよたけの赫映姫。

なよたけ 遠くの方から、あの人達の話し声が聞こえて来るわ! 文麻呂! 聞こえるでしょう! あれは空を飛ぶ月の車の音なの!

文麻呂 僕には聞こえない……  
 なよたけ 文麻呂！あたしを離しては嫌よ！ああ、あなたと一緒にいつまでもいつまでも生きて  
 いたい！あの人達は天の羽衣を持って来たの！それを着せられたら、あたしはもう、  
 月に帰されてしまうんだわ！  
 合唱 (天人達、おごそかに登場しながらの合唱) かうばかり、憂いけく辛けく、なよ竹の  
 花も常なき、現そ身や  
 なよたけ わたしは、月に帰されてしまうんだわ。  
 文麻呂 何を言ってるんだ！なよたけ！お月様からお迎えが来たなんて、そんなことがあるも  
 んか！  
 なよたけ わたしはこの世の人でなくなってしまう……  
 文麻呂 そんなことがあるもんか！  
 文麻呂 (疲れのために心が乱れてるんだよ！  
 合唱 (現し世の旅にまどいて、甲斐なくも  
 文麻呂 (みんな心の迷いなんだ！心の迷いなんだ！心の迷いなんだ！  
 合唱 (散るべきものを、いつの世の契りなりけむ (なよたけは、天人に羽衣を着せられる)  
 なよたけ 文麻呂、ああ、文麻呂、この羽衣を脱がして！  
 文麻呂 なよたけ、どうしたの？どうしたの、なよたけ？  
 なよたけ この羽衣がいけないんだわ。  
 文麻呂 脱がせてあげよう。(急いでかけより、羽衣を脱がせようとするが、天人の一人が、  
 文麻呂の動きを制止する)  
 脱がせてあげよう！(さらに制止する) なよたけ、しっかりおし！(さらに制止する。  
 羽衣を脱がせることが出来なくて) なよたけ！  
 なよたけ 文麻呂、わたしはずっとあなたと一緒に暮らしたかったわ。月から迎えが来て、もう  
 帰らなければならないの。  
 文麻呂 なよたけ！ ぼくをおいていかないでおくれ！  
 なよたけ あなたをおいて、月に帰るのがとても悲しいわ。  
 文麻呂 なよたけ、僕も悲しいよ。  
 なよたけ 月夜の晩は、わたしがいる月を見てね。  
 文麻呂 なよたけ！ぼくも月に連れていっておくれ！連れて行っておくれ！  
 なよたけ あなたがとても恋しいわ。あなたが恋しくて、帰る途中で心が引かれて地上に落ちて  
 しまいそうよ！  
 文麻呂 なよたけ！ ぼくをおいて行かないでおくれ！  
 二重唱  
 文麻呂 (なよたけ、僕はなよたけを愛するために生まれて来たんだ！  
 なよたけ (文麻呂、わたしは竹の林の中に生まれて来たの。だけど、  
 文麻呂 (なよたけは、僕の命だ！  
 なよたけ (わたしは、竹の林を出てしまったの。  
 なよたけ 文麻呂といつまでも、いつまでも  
 文麻呂 僕たちは、もっともっと、もっともっと  
 二重唱 愛し合って、愛し合って、二人だけで一生楽しく暮らしたい。  
 文麻呂 僕たちは、大空の中の幸いの星だ！  
 なよたけ わたしは、もう、竹の林を見捨ててしまったの。  
 なよたけ 見捨ててしまった……。  
 なよたけ ……文麻呂！  
 文麻呂 ……なよたけ！

終曲合唱 珠の緒の惜しき盛りに 立つ霧の 消えぬるごとく天に昇りぬ

合唱音楽の中、なよたけは、飛行する車に乗って百人ばかりの天人を引き連れて、天へ昇っ

ていく。

なよたけ （舞台の裏で）文麻呂！  
文麻呂 （絶叫して） なよたけ！

…………… 幕 ……………

※第二幕に、人権配慮に観点から不適切ではないかと思われる語句が見受けられますが、加藤道夫氏の原作戯曲「なよたけ」の雰囲気大切に、言葉をかえずに作曲いたしました。これらの語句を別の言葉に差し替えますと、原作が持っている雰囲気が大きく損なわれるのではないかという危惧を感じております。ご了承の程、お願い申し上げます。